

論文

介護福祉学生と福祉の心

Welfare Mind of Care and Welfare Students

杉田美基子*¹, 趙 敏廷*², 谷川 和昭*³

要約: 介護福祉士には、福祉の価値観・倫理観といった価値を基盤にした知識・技術が求められる。価値の一部を表す福祉の心にはさまざまな議論があったが、介護福祉学生の実態は未だ明らかになっていない。しかし、看護学生を対象とした福祉の心の構造化についての試みが見受けられる。

そこで、本研究の目的を、介護福祉士を目指す学生、すなわち介護福祉学生が描く「福祉の心」を明らかにし、今後の介護福祉学生に対する価値の育成に向けた基礎資料を得ることとした。

方法は、介護福祉士養成校在籍中の学生を対象に、無記名自記式質問紙による集合調査を実施してデータを分析した。調査内容は、①「福祉の心」に関する65項目、②調査対象者の基本属性、③「福祉の心とはどのようなものであるか」(自由記述)とした。

結果として、福祉の心に「思いやりの心」が欠かすことができないことが示唆された。また、性別や「福祉の心」への関心の度合いにより、福祉の心の捉え方には差が認められた。さらに、福祉の心とは広い範囲に目を向ける必要があることなど、看護学生の描く福祉の心と多くの共通点がみられた。一方で、介護福祉学生は福祉の心は身近な取り組みだと考えているなど、介護福祉学生独自の傾向も明らかになった。

Key Words: 介護福祉士養成、学生、福祉の心、価値、思いやりの心

I. 研究の背景と目的

1. 研究背景

本研究では介護福祉士を目指す学生が描く「福祉の心」について論じる。それにより現状の介護福祉にとどまらない、未来を見据えた人材育成に寄与したい(趙2013:156)。今後の介護福祉学生に対する価値の育成に向けた基礎資料の整理は必須である。介護福祉士は、要介護者の生命や人権・尊厳を尊重した介護を期待されており、利用者主体の「体現」が求められている。そのような介護のためには、介護福祉士は、社会福祉に関する価値観・倫理観といった価値を基盤にした知識・技術としての専門性をもつことが不可欠となっている。

社会福祉の専門性は「知識・技術・価値」である。このことは、1925年に山室が「社会事業化の要性」という講演の中で3つのHと称して、Head, Hand, Heartと言っているのは有名である(山室1925:12)。また、

秋山が、「社会福祉の専門性に関する多くの文献を検討した結果、その行きつく所は『知識・技術・価値』における専門性である。そして、『社会福祉士及び介護福祉士法』もまたここに落ちついているようである。」と今から30年以上も前に述べていることから明らかである(秋山1988:9-10)。

介護福祉士が専門性をもち、自らの仕事に誇りをもつために、とりわけ価値は重要であるが、価値は実体がないものであるため表現することが困難である。そこで、価値の一部を表すものとして議論が交わされている福祉の心に注目したい。先行研究を紐解くと、「福祉の心」には、これまでいくつかの定義があることが分かる。

まず、1993年に阿部は、福祉の心とは「社会的条件に恵まれないマイノリティの人々と、人格的にふれあい、自己も他者も、すなわち、相互に変革される暖かい人間的態度と、福祉問題を生み出す社会に福祉の本質を問い、福祉社会を創造していく共同の社会的努力を育てる豊かな人間の意思と情念を指している。」と述べている(阿部1993:128)。同じく京極は2002年に、福祉の心は「社会的条件に恵まれない人々(クライアント)やその周辺の人々と人格的にふれあい、思いやりの態度をもってそれらの人々と共に生きようという社会連帯の意志と情念

2019年12月3日受付 / 2020年1月23日受理

*¹ Mikiko SUGITA

総社市東部北地域包括支援センター

*² Minjeong CHO

岡山県立大学 保健福祉学部

*³ Kazuaki TANIKAWA

関西福祉大学 社会福祉学部

をいう。」と新たに定義づけている（京極 2002：144）。

つぎに、2007年に谷川は、福祉の心とは「他者の問題を冷たく他人事として見過ごさないで、自分の問題として捉える態度であり、しかも個人的な心情を抑えて、社会のあらゆる資源を活用しながら、危機状態にある人の再建のために力を貸していこうとする姿勢である。」と述べている（谷川 2007：188）。

そして、2009年に阿部らは、福祉の心とは「不利益をこうむっている方々を思いやる気持ちであり、平等を志向する行動である。それはすべての人々がかけがえない人生（すべての他者から尊敬されるべき権利を持つ）を送っているのだということを、少なくとも理解しようとする過程にほかならない。」と述べている（阿部 2009：66）。このように福祉の心をめぐって定義なされるが、共通する理解は得られていないのが現状である。

ところで、福祉の心と近い意味を示すもので、ソーシャルワーク・マインドという言葉がある。2010年に三宅は、「介護福祉専門職として、ソーシャルワーク・マインドの確立は、質の高い福祉サービスを提供する源となり、専門職としての自信と誇りを保ち続ける糧となりうるものである」と述べている（三宅 2010：71-72）。ソーシャルワーク・マインドと福祉の心は完全に一致するものではないが、介護職としての価値としてのソーシャルワーク・マインド確立の重要性が述べられており、福祉の心の確立も同じく重要であると考えられる。

とはいえ、福祉の心をめぐっての学術的な研究は十分に進んでいないように見受けられる。実証研究の取り組みとしては、対人援助職を目指す看護学生、社会福祉学生を対象として福祉の心に関する調査研究が行われており、福祉の心の構造化も試みられているので、まったくないわけではない（谷川ら 2011）。しかしながら、社会福祉学生と双生児ともいえる介護福祉学生を対象にした研究は行われていない。

2. 研究目的

そこで、本研究では介護福祉士を目指す学生が描く「福祉の心」を明らかにし、今後の介護福祉学生に対する価値の育成に向けた基礎資料を得ることを目的とした。

II. 研究方法

1. 調査方法

調査対象者は中国四国地方の介護福祉士養成施設に在籍する学生とした。対象者の条件を揃えるため、介護福

表 1 対象者の属性

項目	カテゴリー	度数	%
性別	男性	213	43.6
	女性	275	56.4
年齢	20歳未満	238	48.8
	20歳代	116	23.8
	30歳代以上	134	27.4
学年	1年	268	54.9
	2年	220	45.1

祉士の資格取得以外のカリキュラムが組まれる短期大学・大学等を除き、乱数表を用いて無作為抽出した。調査を行うにあたって、各養成校の学科主任に趣旨の説明をし、調査協力を依頼した。承諾が得られた7校に在籍中の学生全員を対象とし、無記名自記式質問紙による集合調査を2012年5月28日～6月29日の期間で実施した。

調査の結果、総計572名から協力が得られた（表1）。分析は有効回収のうち、分析項目の全てに欠損値のない票を用いた（有効率85%）。

2. 質問紙の内容

質問紙の作成にあたっては、先行研究（谷川ら 2011）にて使用されている福祉の心に関する質問の65項目を用いた。これらの項目に関して、福祉の心が意味するものとして「大変よくあてはまる」「よくあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」という4段階で評定を求めた。65項目に加えて、さらに、「福祉の心への関心」、「実習経験の有無」、「ボランティア経験の有無」、「身近に障害がある人がいるかどうか」を問う質問、及び「あなたは、福祉の心とはどのようなものだと思いますか」という自由記述解答欄を加えた。

3. 分析方法

量的なデータ分析と質的なデータ分析の双方を行った。量的な分析では、まず全体の傾向を見るため、「福祉の心」をあらわすと考えられる65項目の単純集計を行った。次に、福祉の心を構成する因子を明らかにするために探索的因子分析を行った。因子の抽出には重み付けのない最小二乗法を用い、因子数は、固有値1以上の基準を設けて急落法によって検討し、累積率を考慮して決定した。因子の解釈は、回転後の因子負荷行列に着目して行った。また、因子スコアを算出し、抽出された因子と個人属性における違いを調べるためt検定を行った。

質的な分析として、自由記述内容の得られた回答から、データのコアといえる概念が何であるかを確かむ意図か

ら、テキストマイニングの手法を用いて計量的に分析を行った。テキストマイニングは客観性の保持と恣意性を排除し、膨大なテキストデータから知識発見を行う方法として知られ(細井ら 2011)、今回の分析では、頻出語の確認を行い、クラスター分析と共起ネットワーク分析により作図した。

以上の統計解析には、SPSS 14.0J for Windows ならびに樋口(2012)が開発したKH Coderを用いた。

4. 倫理的配慮

本研究において調査の実施にあたっては、回答協力を求めた対象者である学生に、紙面にて調査研究の趣旨を説明し、成績評価には関係のない自由意志によるものであることを提示し、了承が得られる場合のみ、調査票への記入をするよう依頼した。なお、本研究の実施にあ

り、岡山県立大学倫理委員会の承認を得た。

III. 研究結果

1. 回答分布と因子分析, t 検定の結果

(1) 回答分布

福祉の心に関する各項目の回答分布には、ある程度のばらつきがあることが認められた(表2)。

1つの回答に80%以上の度数がみられた項目はなかった。また、項目間相関行列を算出してみたが、その値が0.8以上を超える項目は見当たらなかった。ただし、床効果と天井効果を調べてみたところ、床効果のある項目は皆無だったものの、天井効果のある項目が約半数を占めていた。しかし、介護福祉士を目指す学生が描く福祉の心を明らかにするという今回の研究目的や各項目内容を考慮した結果、敢えて削除しないこととした。

表2 福祉の心に関する項目群の回答分布：介護福祉学生

項目	回答数			
	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	まあまああてはまる	大変よくあてはまる
1. 一人一人が互いをかけがいのない存在として尊重することである	2 (0.4)	14 (2.9)	150 (30.7)	322 (66.0)
2. 助け合って共によりよく生きようとするところである	2 (0.4)	13 (2.7)	169 (32.8)	313 (64.1)
3. 幸せを願う気持ちである	2 (0.4)	18 (3.7)	158 (32.4)	310 (63.5)
4. 社会の基本である	8 (1.6)	62 (12.7)	250 (51.2)	168 (34.4)
5. 人の命の尊さを知る心である	3 (0.6)	28 (5.7)	138 (28.3)	319 (65.4)
6. 相手の立場になって考えることのできる視点である	2 (0.4)	14 (2.9)	124 (25.4)	348 (71.3)
7. ボランティア活動の実践によって育まれる	16 (3.3)	120 (24.6)	261 (53.5)	91 (18.6)
8. 拠り所となるものである	22 (4.5)	98 (20.1)	270 (55.3)	98 (20.1)
9. 大きな耳と小さな口である	49 (10.0)	145 (29.7)	213 (43.6)	81 (16.6)
10. コミュニケーションから養われるものである	6 (1.2)	50 (10.2)	200 (41.0)	232 (47.5)
11. 相互扶助の精神そのものである	3 (0.6)	64 (13.1)	260 (53.3)	161 (33.0)
12. 誰かに教えてもらうものではない	55 (11.3)	161 (33.0)	155 (31.8)	117 (24.0)
13. 自分で育てていくものである	20 (4.1)	125 (25.6)	227 (46.5)	116 (23.8)
14. 幼いころから子供達の心に植え付けられる必要がある	35 (7.2)	126 (25.8)	200 (41.0)	127 (26.0)
15. 幼少時からの福祉教育に負うところが大きい	38 (7.8)	155 (31.8)	203 (41.6)	92 (18.9)
16. 環境問題を憂える心である	22 (4.5)	146 (29.9)	238 (48.8)	82 (16.8)
17. 環境と共生しようとする心である	15 (3.1)	106 (21.7)	245 (50.2)	122 (25.0)
18. 基本的な権に根ざすものである	6 (1.2)	33 (6.8)	218 (44.7)	231 (47.3)
19. 社会連帯の広がりへと展開する可能性をもつものである	7 (1.4)	46 (9.4)	243 (51.8)	182 (37.3)
20. 福祉コミュニティ形成へと展開する可能性を持つものである	5 (1.0)	44 (9.0)	245 (50.2)	194 (39.8)
21. すべての人たちが人格的にふれあう共感していくことである	7 (1.4)	46 (9.4)	214 (43.9)	221 (45.3)
22. 誰もが可能な限り住み慣れた地域社会の中で快適に暮らしていくことである	7 (1.4)	53 (10.9)	177 (36.3)	251 (51.4)
23. お母さんの心である	55 (11.3)	156 (32.0)	191 (39.1)	86 (17.6)
24. 相手のニーズを把握して援助活動を展開していく際に土台となるものである	7 (1.4)	45 (9.2)	213 (43.6)	223 (45.7)
25. 何者にも代えがたい大切な宝のことである	15 (3.1)	91 (18.6)	213 (43.6)	169 (34.6)
26. 大海の一滴のしずくと同じである	59 (12.1)	149 (30.5)	189 (38.7)	91 (18.6)
27. 教室で先生との会話の中からも学び取れるものである	41 (8.4)	152 (31.1)	223 (45.7)	72 (14.8)
28. 友人とのコミュニケーションのなかからも学びとれるものである	18 (3.7)	121 (24.8)	258 (52.9)	91 (18.6)
29. メンツ(立場)で仕事をするのではないことである	17 (3.5)	94 (19.3)	222 (45.5)	155 (31.8)
30. 役目で仕事をしていくことが大事なことである	26 (5.3)	158 (32.4)	208 (42.6)	96 (19.7)
31. 自らが育むものである	9 (1.8)	66 (13.5)	238 (48.8)	175 (35.9)
32. 学び合って共によりよく生きようとするところである	9 (1.8)	31 (6.4)	228 (46.7)	220 (45.1)
33. 思いやりの心	2 (0.4)	9 (1.8)	115 (23.6)	362 (74.2)
34. 自分たちの周りで困っている人がいれば互いに助け合おうという心である	4 (0.8)	18 (3.7)	247 (50.1)	319 (65.4)
35. 一律に定義されるべきものではない	13 (2.7)	54 (11.1)	201 (41.2)	220 (45.1)
36. 一人ひとりが考え醸成していくものである	8 (1.6)	66 (13.5)	247 (50.6)	167 (34.2)
37. 他者に尽くすところのことである	14 (2.9)	90 (18.4)	235 (48.2)	149 (30.5)
38. 言葉が通じなくても多くの国でも共通なものである	10 (2.0)	42 (8.6)	182 (37.3)	254 (52.0)
39. 崇高な精神ではない	38 (7.8)	108 (22.1)	237 (48.6)	105 (21.5)
40. 自分にできることをすることである	8 (1.6)	54 (11.1)	202 (41.4)	224 (45.9)
41. できることから始めればよいことである	9 (1.8)	37 (7.6)	197 (40.4)	245 (50.2)
42. 特別なものではない	12 (2.5)	51 (10.5)	192 (39.3)	233 (47.7)
43. すべての人々の心の中に本来ある支え合いの精神である	11 (2.3)	28 (5.7)	211 (43.2)	238 (48.8)
44. 自然に湧いてくるものである	24 (4.9)	101 (20.7)	228 (46.7)	135 (27.7)
45. 幼児期から様々な体験を通して育まれるべきものである	21 (4.3)	89 (18.2)	232 (47.5)	146 (29.9)
46. 感謝の心	9 (1.8)	38 (7.8)	166 (34.0)	275 (56.4)
47. 身のまわりの小さなところから芽生える	8 (1.6)	37 (7.6)	225 (46.1)	218 (44.7)
48. 他人の痛みを自分のものと感じることである	12 (2.5)	44 (9.0)	217 (44.5)	215 (44.1)
49. 十分力を出せない人々と社会の力で生きる喜びをともに分かち合っていく心である	14 (2.9)	56 (11.5)	233 (47.7)	185 (37.9)
50. 幼児期から地域全体で育むことが大切である	24 (4.9)	73 (15.0)	225 (46.1)	166 (34.0)
51. 教育の底流を流れる大事な教育と認識できるものである	11 (2.3)	81 (16.6)	269 (55.1)	127 (26.0)
52. 教え込みするものではない	19 (3.9)	86 (17.6)	223 (45.7)	160 (32.8)
53. 暗記するものではない	20 (4.1)	52 (10.7)	167 (34.2)	249 (51.0)
54. 同情だけのいたわりではない	16 (3.3)	22 (4.5)	179 (36.7)	271 (55.5)
55. 形だけのいたわりではない	17 (3.5)	25 (4.7)	160 (32.8)	288 (59.0)
56. for youではなく、with youでなくてはならないものである	11 (2.3)	58 (11.9)	237 (48.6)	182 (37.3)
57. 人に喜びを提供することである	11 (2.3)	53 (10.9)	220 (45.1)	204 (41.8)
58. 一番困っている人に誠実に対応することである	23 (4.7)	79 (16.2)	229 (46.9)	157 (32.2)
59. 待つ心が大事である	20 (4.1)	62 (12.7)	218 (44.7)	188 (38.5)
60. 素敵なこと	18 (3.7)	54 (11.1)	193 (39.5)	223 (45.7)
61. 他を思いやることである	4 (0.8)	21 (4.3)	182 (37.3)	281 (57.6)
62. 共に生きようとするところである	4 (0.8)	25 (5.1)	172 (35.2)	287 (58.9)
63. 励まし合って共によりよく生きようとするところである	7 (1.4)	29 (5.9)	196 (40.2)	256 (52.5)
64. 立場が異なる人たちが互いに支え合うことである	8 (1.6)	42 (8.6)	199 (40.8)	239 (49.0)
65. 協力し合うことで環境・社会をつくっていくことである	5 (1.0)	22 (4.5)	195 (40.0)	266 (54.5)

n (%)

(2) 因子分析

65項目に対して、因子数を9に指定し、因子分析を行った結果、比較的単純構造を有した因子パターン行列が得られた(表3)。因子負荷量が0.35以上の項目に着目すると、第1因子は、「立場が異なる人たちが互いに支え合うことである」「励まし合って共によりよく生きようとする事である」「協力し合うことで環境・社会をつくっていくことである」など計12項目からなり、「共生の思いやり」因子と解釈できた。第2因子は、「教室で先生との会話の中からも学び取れるものである」「友人とのコミュニケーションのなかからも学びとれるものである」「環境問題を憂える心である」など計10項目からなり、「周囲の環境からの学び」因子と解釈できた。第3因子は、「一人一人が互いをかけがえのない存在として尊重することである」「社会の基本である」「助け合って共によりよく生きようとする事である」など計8項目からなり、「人間尊重の願い」因子と解釈できた。第4因子は、「幼少期からの福祉教育に負うところが大きい」「幼児期から様々な体験を通して育まれるべきものである」など計5項目からなり、「幼少期から育まれるもの」因子と解釈できた。第5因子は、「福祉コミュニティ形成へと展開する可能性をもつものである」「社会連帯の広がりへと展開する可能性をもつものである」など計5項目からなり、「地域社会との将来的な連帯」因子と解釈できた。第6因子は、「同情だけのいたわりではない」「教え込みするものではない」など計4項目からなり、「普遍的理解」因子と解釈できた。第7因子は「思いやりの心」「できることから始めればいいことである」など計5項目からなり、「身近な取り組み」因子と解釈できる。第8因子は、「崇高な精神ではない」「特別なものではない」など計4項目からなり、「個別的な価値観」因子と解釈できる。第9因子は、「自分の手で育てていくものである」など計3項目からなり、「自己育成」因子であると解釈できる。

(3) t検定による比較

1) 性別による因子毎の比較分析

因子分析によって抽出された9つの因子それぞれについて、性別による因子スコアの比較を行った(図1)。その結果、「個別的な価値観」「周囲の環境からの学び」については男女性別による有意さは認められなかった。しかし、「幼少期から育まれるもの」「地域社会との将来的な連帯」「自己育成」(p<.05)、そして「人間尊重の願い」「普遍的理解」「身近な取り組み」(p<.01)「共生の

思いやり」(p<.001)で有意な差が認められた。

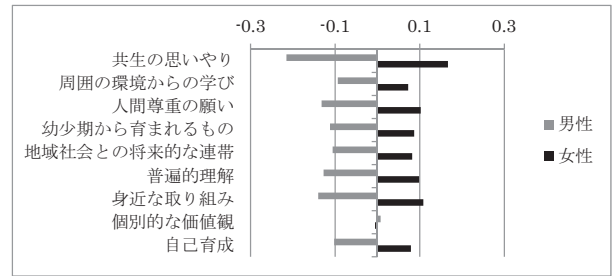


図1 性別による因子スコア

2) 年齢区分による因子毎の比較分析

因子分析によって抽出された9つの因子それぞれについて、年齢区分による因子スコアの比較を行った(図2)。その結果、「共生の思いやり」「人間尊重の願い」「幼少期から育まれるもの」「地域社会との将来的な連帯」「普遍的理解」「身近な取り組み」「個別的な価値観」「自己育成」については年齢区分別による有意差は認められなかった。しかし、「周囲の環境からの学び」においては有意な差が認められた(p<.01)。

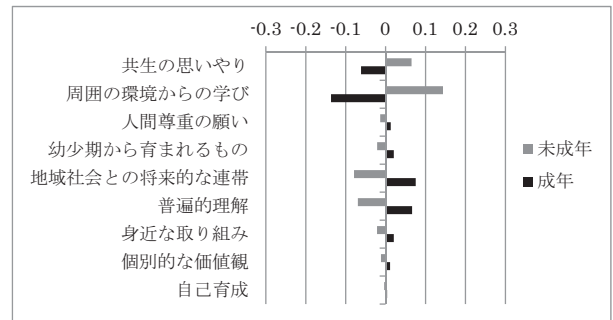


図2 年齢による因子スコア

3) ボランティア経験による因子毎の比較分析

因子分析によって抽出された9つの因子それぞれについて、ボランティア経験の有無による因子スコアの比較を行った(図3)。その結果、9つ全ての因子において有意差が認められなかった。

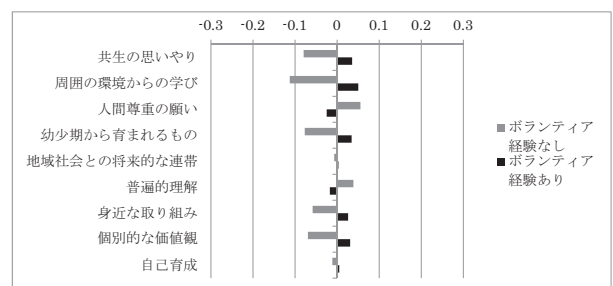


図3 ボランティア経験による因子スコア

表3 福祉の心に関する項目群の探索的因子分析：介護福祉学生

項目	抽出された因子									共通性
	1 共生の 思いやり	2 周囲の 環境から の学び	3 人間尊重 の願いの 理解	4 幼少期か ら育まれ るもの	5 地域社会 との得來 的な連帯	6 普遍的 理解	7 身近な 取り組み	8 個別的な 価値観	9 自己育成	
57. 人に喜びを提供することである	0.85	0.08	0.01	-0.17		0.02	-0.03	-0.03	0.05	0.60
64. 立場が異なる人たちが互いに支え合うことである	0.82	-0.02	-0.07	-0.01	0.06	-0.01	-0.05	0.05	-0.05	0.55
63. 励まし合って共によりよく生きようとする事である	0.78	-0.12	0.08	-0.05	0.10	-0.05	0.03	-0.01	-0.02	0.47
62. 共に生きようとする事である	0.74	-0.19	0.10	-0.06	0.12	-0.02	0.10	-0.03	-0.03	0.48
59. 待つ心が大事である	0.69	0.23	-0.22	-0.07	-0.06	0.14	-0.03	-0.02	0.06	0.52
58. 一番困っている人に誠実に対応することである	0.68	0.07	0.02	0.03	-0.15	-0.02	-0.05	-0.15	0.16	0.49
65. 協力し合うことで環境・社会をつくっていくことである	0.64	-0.03	-0.02	-0.01	0.24	-0.01	-0.01	0.01	-0.07	0.45
60. 素敵なこと	0.56	0.17	-0.03	0.00	-0.04	0.08	0.12	-0.10	0.00	0.51
61. 他を思いやることである	0.56	-0.09	0.14	-0.01	0.06	0.04	0.20	-0.04	-0.02	0.44
43. すべての人々の心の中に本来ある支え合いの精神である	0.52	-0.08	0.10	0.02	0.06	0.01	0.08	0.13	0.01	0.41
49. 十分力を出せない人々と社会の力で生きる喜びをともに分かち合っていく心である	0.45	0.15	0.12	0.01	0.07	-0.03	0.03	0.03	-0.08	0.44
44. 自然に湧いてくるものである	0.39	0.19	-0.01	0.06	-0.10	-0.06	0.00	0.22	0.10	0.39
37. 他者に尽くすことである	0.33	0.23	0.17	0.00	-0.08	-0.10	-0.02	0.10	0.08	0.53
48. 他人の痛みを自分のものと感じることである	0.29	0.03	0.15	0.23	0.00	-0.02	0.23	-0.12	-0.01	0.62
38. 言葉が通じなくてもどの国でも共通なものである	0.22	-0.04	0.12	-0.08	0.21	0.03	0.11	0.15	-0.03	0.62
27. 教室で先生との会話の中から学び取れるものである	-0.10	0.82	0.10	-0.14	-0.05	-0.07	0.13	-0.02	-0.06	0.61
28. 友人とのコミュニケーションのなかから学びとれるものである	-0.12	0.73	0.07	-0.18	-0.08	0.00	0.28	0.10	-0.09	0.59
16. 環境問題を憂える心である	0.03	0.61	-0.18	0.04	0.26	-0.02	-0.09	0.08	-0.01	0.52
17. 環境と共生しようとする心である	-0.02	0.57	-0.18	0.08	0.26	-0.05	0.06	0.09	-0.06	0.59
30. 役目で仕事をしていくことが大事だということである	0.08	0.54	-0.19	0.04	0.12	-0.10	-0.07	0.01	0.10	0.63
7. ボランティア活動の実践によって育まれる	0.10	0.43	0.22	-0.04	-0.01	-0.10	-0.10	0.06	0.02	0.52
26. 大海の一滴のしずくと同じである	0.03	0.43	0.00	0.07	0.04	-0.05	-0.04	0.20	-0.03	0.48
25. 何者にも代えがたい大切な宝のことである	0.15	0.37	0.02	0.08	0.02	0.04	0.07	-0.01	0.05	0.42
9. 大きな耳と小さな口である	-0.04	0.36	0.17	0.08	0.03	0.13	-0.10	0.02	-0.01	0.53
10. コミュニケーションから養われるものである	0.03	0.36	0.17	-0.10	0.09	0.08	0.16	-0.11	-0.05	0.50
23. お母さんの心である	0.10	0.32	0.08	0.22	-0.11	0.04	0.03	-0.10	0.06	0.45
1. 一人一人が互いをかけがいのない存在として尊重することである	0.10	-0.12	0.67	-0.06	0.07	-0.05	0.05	0.06	0.01	0.58
4. 社会の基本である	-0.03	0.12	0.65	0.16	-0.09	-0.04	-0.23	0.06	0.07	0.57
2. 助け合って共によりよく生きようとする事である	0.13	-0.15	0.65	-0.08	0.01	-0.02	0.08	0.08	-0.02	0.38
3. 幸せを願う気持ちである	0.05	0.18	0.59	-0.06	-0.08	0.05	0.04	-0.15	-0.03	0.41
6. 相手の立場になって考えることのできる視点である	-0.01	-0.16	0.52	-0.01	0.12	0.03	0.17	0.01	0.01	0.51
5. 人の命の尊さを知る心である	0.11	0.14	0.49	-0.03	0.09	0.05	0.00	-0.14	-0.04	0.57
11. 相互扶助の精神そのものである	-0.13	0.07	0.48	0.18	0.08	-0.02	0.05	0.03	0.04	0.56
8. 拠り所となるものである	0.10	0.32	0.41	0.08	-0.09	0.04	-0.14	-0.01	0.01	0.63
15. 幼少時からの福祉教育に負うところが大きい	-0.21	0.00	0.02	0.85	0.11	0.00	0.01	-0.08	0.09	0.41
14. 幼いころから子供達の心に植え付けられることが必要である	-0.21	0.02	0.05	0.84	0.08	-0.04	0.06	-0.06	0.09	0.44
50. 幼児期から地域全体で育むことが大切である	0.16	-0.01	-0.05	0.70	-0.04	-0.02	0.14	0.07	-0.14	0.45
45. 幼児期から様々な体験を通して育まれるべきものである	0.22	-0.16	-0.10	0.70	-0.03	-0.07	0.12	0.09	-0.01	0.45
51. 教育の底流を流れる大事な教育と認識できるものである	0.16	0.18	0.14	0.35	0.07	0.15	-0.12	-0.03	-0.13	0.36
20. 福祉コミュニティ形成へと展開する可能性を持つものである	0.05	0.06	-0.04	0.15	0.70	-0.01	-0.12	-0.02	0.07	0.50
18. 基本的な人権に根ざすものである	-0.07	0.03	0.10	0.06	0.62	0.10	-0.06	0.05	-0.05	0.59
19. 社会連帯の根がりと展開する可能性をもつものである	0.03	0.14	0.07	0.01	0.61	0.03	-0.17	0.04	0.01	0.52
22. 誰もが可能な限り住み慣れた地域社会の中で快適に暮らしていくことである	0.09	0.11	-0.09	-0.02	0.52	0.02	0.13	-0.07	0.05	0.57
24. 相手のニーズを把握して援助活動を展開していく際に土台となるものである	0.06	0.01	0.13	-0.04	0.42	0.03	0.02	0.18	0.08	0.54
21. すべての人たちが人格的にふれあって共感していくことである	0.30	0.10	0.07	0.02	0.32	0.00	0.03	-0.10	0.03	0.58
29. メンツ(立場)で仕事をするのはではないということである	-0.08	0.19	-0.03	-0.02	0.20	0.16	0.17	0.14	0.04	0.60
54. 同情だけのいわりではない	0.02	-0.06	0.02	0.00	0.08	0.90	0.02	-0.06	-0.02	0.60
55. 形だけのいわりではない	0.03	-0.10	-0.01	0.05	0.11	0.89	0.03	-0.07	-0.04	0.51
53. 暗記するものではない	0.04	-0.10	0.00	-0.12	-0.02	0.77	-0.02	0.09	0.08	0.54
52. 教え込みするものではない	-0.07	0.13	-0.04	-0.04	-0.09	0.48	0.06	0.25	0.17	0.63
56. for youではなく、with youでなくてはならないものである	0.21	0.10	0.06	0.07	0.02	0.26	-0.08	0.19	-0.10	0.56
46. 感謝の心	0.25	0.09	-0.02	0.22	-0.15	0.02	0.57	-0.13	-0.05	0.57
33. 思いやりの心	0.07	-0.15	0.13	-0.04	0.22	0.00	0.53	0.00	0.00	0.62
41. できることから始めればよいことである	-0.07	0.04	-0.01	-0.03	-0.15	0.14	0.52	0.32	0.11	0.86
47. 身のまわりの小さなところから芽生える	0.28	0.10	-0.07	0.12	-0.07	0.01	0.47	0.06	-0.05	0.85
40. 自分にできることをすることである	0.05	0.10	-0.03	0.09	-0.26	-0.02	0.42	0.34	0.06	0.43
32. 学び合って共によりよく生きようとする事である	0.11	0.15	0.16	-0.05	0.24	-0.11	0.34	-0.02	0.04	0.60
34. 自分たちの周りについている人がいれば互いに助け合おうという心である	0.15	-0.03	0.16	0.00	0.32	-0.09	0.33	0.06	-0.04	0.52
39. 崇高な精神ではない	-0.13	0.28	-0.10	-0.08	0.08	-0.03	0.01	0.60	-0.15	0.56
35. 一律に定義されるべきものではない	0.01	-0.07	0.14	-0.03	0.06	0.05	-0.03	0.50	0.06	0.56
42. 特別なものではない	-0.11	-0.06	-0.04	0.08	0.02	0.19	0.28	0.44	0.02	0.68
36. 一人ひとりが考え醸成していくものである	0.11	0.01	0.15	0.05	0.13	-0.07	-0.06	0.39	0.05	0.71
13. 自分の手で育んでいくものである	0.08	0.04	-0.03	0.00	0.11	0.07	-0.02	-0.14	0.80	0.69
12. 誰かに教えてもらうものではない	-0.06	-0.16	0.07	0.10	-0.06	0.04	-0.01	0.11	0.57	0.66
31. 自らが育むものである	0.04	0.13	-0.01	-0.04	0.19	-0.08	0.23	-0.04	0.48	0.66
因子抽出法: 重みなし最小二乗法										
固有値	19.32	2.81	2.48	1.80	1.35	1.14	0.97	0.93	0.70	
因子寄与率	29.32	4.32	3.81	2.77	2.08	1.76	1.50	1.43	1.08	
因子相関行列										
因子	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
1 共生の思いやり	1.00									
2 周囲の環境からの学び	0.58	1.00								
3 人間尊重の願いの	0.70	0.44	1.00							
4 幼少期からの育まれるもの	0.55	0.49	0.45	1.00						
5 地域社会との得來的な連帯	0.63	0.39	0.64	0.40	1.00					
6 普遍的理解	0.45	0.30	0.35	0.39	0.37	1.00				
7 身近な取り組み	0.54	0.30	0.45	0.20	0.47	0.40	1.00			
8 個別的な価値観	0.38	0.34	0.32	0.38	0.29	0.49	0.35	1.00		
9 自己育成	0.21	0.31	0.15	0.21	0.17	0.29	0.20	0.44	1.00	

4) 実習経験による因子毎の比較分析

因子分析によって抽出された9つの因子それぞれについて、実習経験による因子スコアの比較を行った(図4)。その結果、9つ全ての因子において有意差が認められなかった。

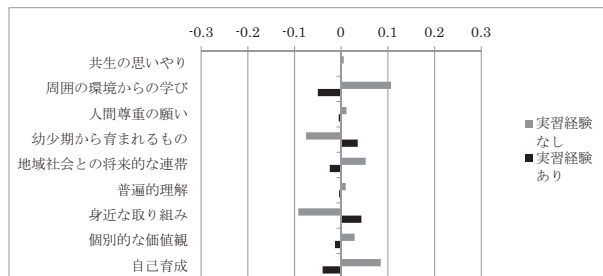


図4 実習経験による因子スコア

5) 身近に障害がある人の存在の有無による因子毎の比較分析

因子分析によって抽出された9つの因子それぞれについて、身近に障害がある人の存在の有無による因子スコアの比較を行った(図5)。その結果、「共生の思いやり」「周囲の環境からの学び」「人間尊重の願い」「幼少期から育まれるもの」「普遍的な理解」「身近な取り組み」「個別的な価値観」「自己育成」については、身近に障害がある人がいるかないかで有意差は認められなかった。しかし、「地域社会との将来的な連帯」では、有意な差が認められた ($p < .05$)。

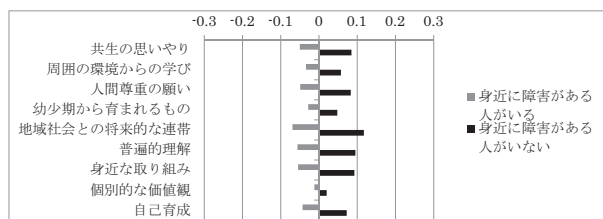


図5 身近に障害のある者との関わりによる因子スコア

6) 「福祉の心」への関心による因子毎の比較分析

因子分析によって抽出された9つの因子それぞれについて、身近に障害がある人がいるかないかによる因子スコアの比較を行った(図6)。その結果、「身近な取り組み」「個別的な価値観」「自己育成」について有意差は認められなかった。しかし、「幼少期から育まれるもの」($p < .05$)、「普遍的な理解」($p < .01$)「共生の思いやり」「周囲の環境からの学び」「人間尊重の願い」「地域社会との将来的な連帯」($p < .001$)と有意差が認められた。

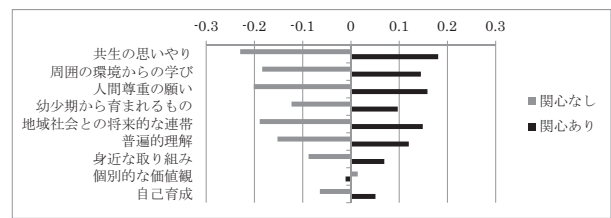


図6 「福祉の心」に対する関心による因子スコア

2. テキストマイニングによる分析

(1) 頻出語

本研究では研究者の主観が入り込むのをできるだけ避けるため、テキストマイニングの技法を用いた(細井ら2011)。自由記述回答で得た405の文をKH coderによって形態素に分解したところ、異なり語数が690の語が含まれており、総抽出語は4978であった。全体で出現回数が多かった語をみると、「心」が139回、次いで「人」が108回、続いて「思う」が63回、「思いやり」が57回、「相手」が50回という結果であった。「心」「思う」「福祉」の出現回数が多かったため、「福祉の心とは～と思う」という書かれ方をしていないか確認したところ、そのような書かれかたをしている文章はほとんどなく、「利用者の心を…」「誰かを思ったり…」「福祉とは幸せ…」というように書かれており、必要な語であると判断したため除外しなかった。頻出後上位150語は以下のとおりである(表4)。

(2) クラスタ分析

頻出語の詳しい構成を調べるために、出現回数10回以上の頻出語に基づき、150位までの出現語のうち対象となる出現語を厳選しコーディングを行った。コーディングルールは、例えば<障害>と使い方が類似していた「<障害><障る><不自由>」の3語のうちいずれかが含まれれば、その文章に<障害>というコードを与えるといった条件を指定した。このような基準に29のコードで構成されたコーディングファイルを作成した。その29のコード化された形態素に、Ward法でユークリッド距離にて階層的クラスタ分析を行い、デンドログラムを作成したところ、5つのクラスタに分類された(図7)。

クラスタ1は、「互い、助け合う、励ます、共に」で構成されることから、「互いに励まし助け合う」と名付けた。クラスタ2は、「障害、利用者、寄り添う、支援」で構成されることから、「障害(様々な困難)を抱える人に寄り添った支援を行う」と名付けた。クラスタ3は、「心、思いやり、分かる、福祉、思う、愛、

表4 頻出語上位150語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
心	139	手助け	9	接する	5	好き	3	個性	2
人	108	環境	8	他	5	合う	3	子ども	2
思う	63	高齢	8	平等	5	思い	3	思える	2
思いやり	57	自然	8	理解	5	視点	3	自ら	2
相手	50	それぞれ	7	一緒	4	自立	3	自己	2
幸せ	41	共感	7	感じる	4	守る	3	弱い	2
思いやる	38	考え	7	関わる	4	授業	3	主体	2
気持ち	35	行う	7	基本	4	出る	3	手	2
福祉	32	障害	7	寄り添う	4	常に	3	受容	2
考える	31	精神	7	共有	4	全体	3	少し	2
助け合う	30	他者	7	広い	4	相互	3	障る	2
持つ	29	お互い	6	今	4	存在	3	場合	2
自分	29	介護	6	今後	4	扶助	3	心から	2
生きる	28	関係	6	事	4	分かっ	3	身	2
支える	26	支援	6	笑顔	4	励ます	3	人達	2
共に	25	自身	6	全て	4	お互い様	2	世の中	2
大切	16	周り	6	同情	4	お手伝い	2	成長	2
尊重	15	出来る	6	不自由	4	スタートライ	2	正しい	2
立場	15	大事	6	本来	4	愛する	2	生き方	2
人間	14	知る	6	しあわせ	3	安心	2	接	2
助ける	13	地域	6	ケア	3	意識	2	思い	2
生活	13	分かる	6	意見	3	違う	2	想う	2
利用	13	優しい	6	意思	3	育む	2	送る	2
社会	11	愛	5	意味	3	気がつく	2	尊い	2
他人	11	一人ひとり	5	恩返し	3	共生	2	尊敬	2
願う	10	協力	5	家族	3	共存	2	尊厳	2
互いに	10	教える	5	学ぶ	3	強い	2	多く	2
行動	10	個人	5	感謝	3	傾聴	2	対人	2
必要	10	幸福	5	求める	3	見る	2	暖かい	2
困る	9	人権	5	互い	3	言う	2	追求	2

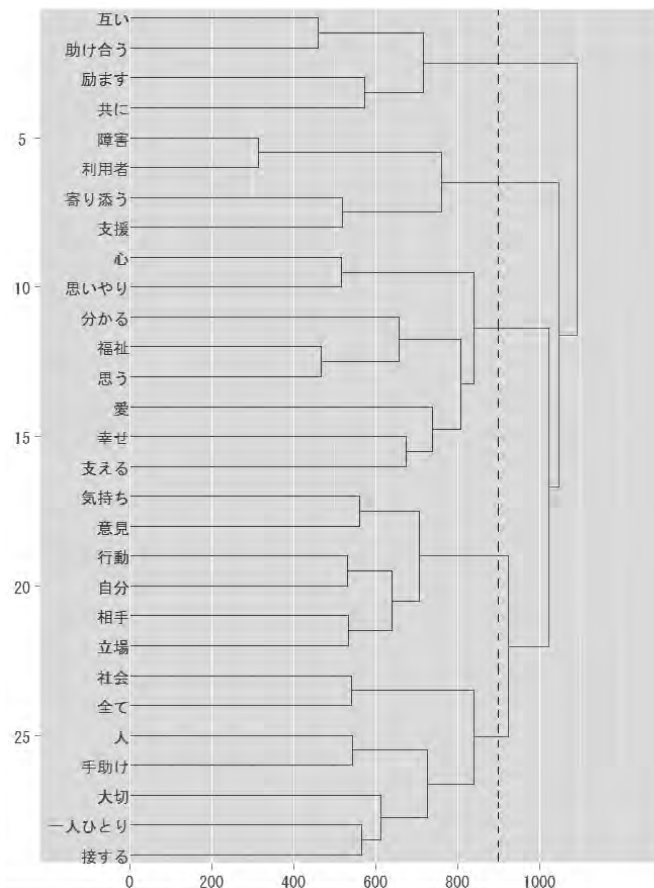


図7 クラスタ分析によるデンドログラム

幸せ、支える」で構成されることから、「思いやりの心を持ち、幸せを支える思い」と名付けた。クラスター4は「気持ち、意見、行動、自分、相手、立場」で構成されることから、「相手の立場や気持ちを尊重した行動」と名付けた。クラスター5は、「社会、全て、人、手助け、大切、一人ひとり、接する」で構成されることから、「全ての人を大切に、一人ひとりに向き合って接することのできる手助け」と名付けた。

(3) 共起ネットワーク

抽出語の共起ネットワークを中心性（固有ベクトル）を指定して表した（図8）。

頻出後全体における共起ネットワークでは、「心」を中心に「相手」「思う」「人」「思いやり」が強い結びつきを示していた。

IV. 考察

1. 回答分布と福祉の心

看護学生に対して行われた調査結果（谷川ら 2011）と比較をしながら考察を進めていく。

本研究では、福祉の心に関する各項目の回答分布には

ばらつきがあり、1つの回答肢に80%以上の度数が見られる項目はなかった。「大変よくあてはまる」という回答肢に70%以上の度数が見られた項目は2つあり、1つ目は、「33. 思いやりの心」で74.2%、2つ目は「6. 相手の立場になって考えることのできる視点である」で71.3%であった。次いで60%以上の度数が見られた項目は5つあり、「1. 一人一人が互いをかけがえのない存在として尊重することである」が66.0%、「5. 人の命の尊さを知る心である」「34. 自分たちの周りで困っている人がいれば互いに助け合おうという心である」が65.4%「2. 助け合って共によりよく生きようとする心である」が64.1%、「3. 幸せを願う気持ちである」が63.5%という順に回答数が多かった。上記7項目を谷川ら（2011）の研究と照らし合わせると、5項目は看護師を目指す学生においても60%以上の度数であり高い適合度を示している。中でも、「33. 思いやりの心」に関しては、谷川ら（2011）の研究において看護学生は76.1%という高い適合度を示している。そのため、「思いやりの心」は福祉の心を表す際に欠かすことができないものであると考える。

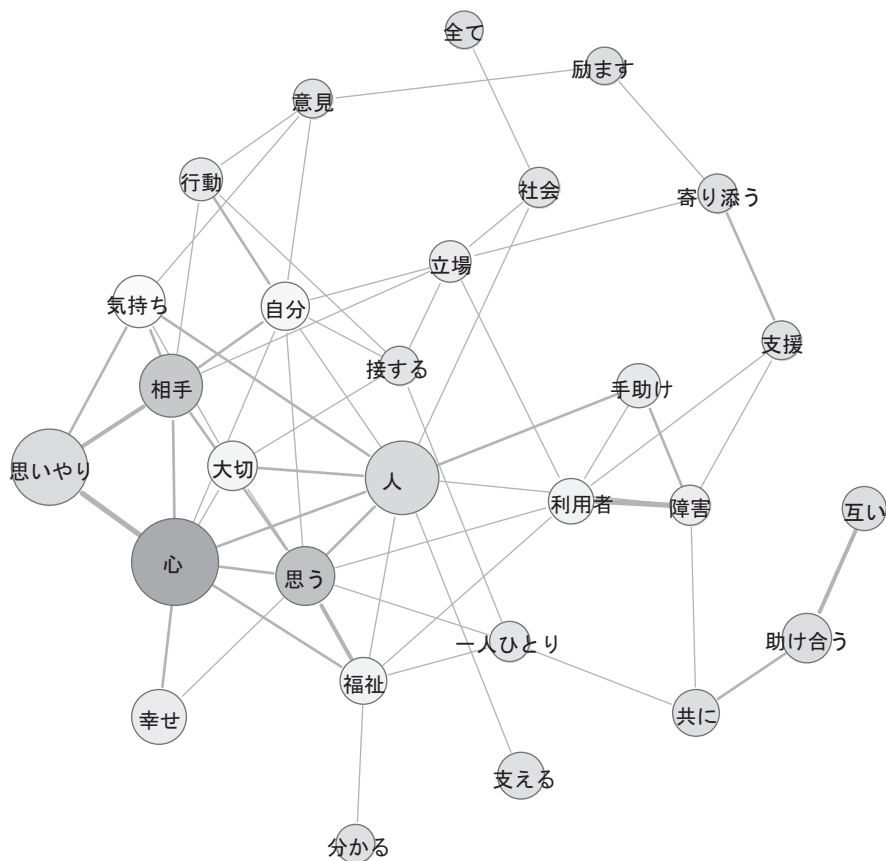


図8 共起ネットワークによる中心性（固有ベクトル）

一方、谷川ら（2011）の看護学生を対象に行われた調査において、「3. 幸せを願う気持ちである」は28.4%、「5. 人の命の尊さを知る心である」は43.2%であり、今回の調査結果に比べて低い値であった。この点に関しては、看護学生は「人の命の尊さを知る心」は福祉的な心ではなく、医療・看護的な心であると捉えているのではないかと考える。そのため、「幸せを願う気持ちである」「人の命の尊さを知る心である」のは、介護福祉士を目指す学生が描く「福祉の心」の特徴といえる。

2. 因子分析と福祉の心

先行研究（谷川ら 2011）において、看護学生が描く福祉の心として抽出された9つの因子は、第1因子「共生の思いやり」、第2因子「環境からの学び」、第3因子「普遍的な理解」、第4因子「個別ニーズへの対応」、第5因子「幼少期から育まれるもの」、第6因子「人間尊重の願い」、第7因子「将来の社会連帯」、第8因子「実践への根拠」、第9因子「自己育成」であった。

そこで、先行研究との比較を試みるため、本研究でも65項目に対して、因子数9による比較的単純構造を有した因子パターン行列を得ることにした。また、9つの因子を構成する項目を先行研究の各因子の項目と見比べ、共通する因子が多い因子に関しては、先行研究と似通った因子名をつけることが妥当と考えた。

第1因子「共生の思いやり」、第2因子「周囲の環境からの学び」、第3因子「人間尊重の願い」、第4因子「幼少期から育まれるもの」、第5因子「地域社会との将来的な連帯」、第6因子「普遍的理解」、第7因子「身近な取り組み」、第8因子「個別的な価値観」、第9因子「自己育成」となった。このようにネーミングをしたが、抽出される因子の順番には違いはあるものの、9つの因子のうち7つの因子は共通する項目が多かったことが分かる。

残り2つの因子を見てみると、介護福祉学生においては「身近な取り組み」「個別的な価値観」という因子が得られた。介護福祉学生の方の「身近な取り組み」とは、「できることから始めればよいことである」「身の回りの小さなおとこから芽生える」「自分にできることをすることである」などから構成されており、学生自身の今までの経験や生活歴が影響した結果得られたものであると考えられる。また、「個別的な価値観」とは、「一律に定義されるものではない」「一人ひとりが考え醸成していくものである」などから構成されており、支援者側の

価値観にそれぞれ違いがあることを示しているように受け取れる。このことから介護福祉学生は、福祉の心とは支援者一人ひとりで形は違うものであること、にもかかわらず、福祉の実践は誰にでもできることであり、誰しもが福祉の心を持つことが大切と捉えているのではないかと考えられる。

3. t検定による比較と福祉の心

先行研究（谷川ら 2011）においては個人属性との関連は明らかにされていない。本研究では個人属性である「性別」「年齢区分」「ボランティア経験の有無」「実習経験の有無」「身近に障害がある人の存在の有無」「福祉の心への関心の有無」といった2つのグループに分けてそれぞれの平均値を算出し、その比較したところに新規性があると言ってよい。

そして、t検定の結果、もっとも多く因子に対して有意差が見られた項目は性別であった。有意差がみられた8つの因子では女性が男性より高い値を示していた。日本の介護は社会通念上ならびに社会慣習的に女性（配偶者・娘・嫁等）が担ってきた。そのような背景があることは事実であるが、介護は生活支援（炊事、洗濯、掃除等）も含むことから、女性の方が仕事をしやすい、福祉に対する理解を示しやすいともいえるのではないだろうか。

また、福祉の心に対する関心の有無においても有意差が多く認められていた。「福祉の心」に関心があった学生の方が、「福祉の心」に関心がなかった学生よりも高い値を示していた。内発的動機づけが高い者は、自己の能力を最大限に発揮するためや能力を向上させるために課題に対して積極的に挑戦する傾向があるという（吉川 2008）。「福祉の心」への関心を、知的好奇心を原型とする内発的動機づけであると考え、福祉の心に対する関心がある学生の方が、関心がない学生よりも福祉について考える機会が多いと推測され、そのため積極的な姿勢を示していると考えられ、関心がある学生の方が高い数値が出たことは当然であると言える。そして、人は、自分が興味・関心のあることで有能さを追求し、そしてその興味・関心のあることが社会や人の役に立つ職業と結びつくことによって、生きがいを感じるようになる。これを実現するのが自己実現の欲求である（櫻井 2009）。このことから、「福祉の心」だけに限らず、自分が目指す分野のことについてより多くの関心を示すことは、学生自身の生きがいのため、自己実現のために良い影響を

もたらずだろう。

一方、ボランティア経験の有無及び、実習経験の有無に関してはほとんどの因子において有意差が見られなかった。学生自体の積極的なボランティア活動への参加などで、幅広く物事が捉え、感性が豊かになり、介護に携わる人としての資質が向上すると言われている。しかし、今回の調査ではボランティア経験や実習経験の有無による差異は見られなかった。このことは、テキストマイニングの結果を見ても同様であった。差異が見られなかった理由としては、2つあげられる。今回の調査では養成校入学後の経験について問う質問をしたが、そもそも福祉の心は養成校入学以前の経験が大きく影響しているということが、まず考えられるだろう。次に、ボランティア内容やどのような体験であったかは限定していないので、人によって質問の受け止め方に差があったということも考えられる。

いずれにしても、平塚(2004)が「人間福祉教育においては、第一に、ソーシャルワーク・マインドの育成を教育の軸に据えることである。第二は、在学中に職業選択の支援と職業人としてのアイデンティティ形成支援が必要である。それにはそうした機会を保障する大学等学校の理念や思想、そのもとでの教員側による教育課程の編成や教授法など全体的な取り組みが問われているところであろう。」と述べていることから、学生が養成校入学前にすでに介護福祉士として求められる福祉の心が形成されていても、されていなくても、養成校が学生の卒業までにいかに働きかけるかが、質の高い介護福祉士を確保するには欠かせない要件といえる。介護福祉士養成のために福祉の心の育成を考えるのであれば、今後ボランティアや実習での経験による影響をより詳しく調査し、介護福祉士養成に必要なカリキュラムを考えることも必要となってくると考える。

4. クラスタ分析と福祉の心

クラスタ分析によって得られた概念構成は5つのカテゴリーで示されるものであった。すなわち、クラスタ1は、「互いに励まし助け合う」、クラスタ2は、「障害(様々な困難)を抱える人に寄り添った支援を行う」、クラスタ3は、「思いやりの心を持ち、幸せを支える思い」、クラスタ4は、「相手の立場や気持ちを尊重した行動」、クラスタ5は、「全ての人を大切にし、一人ひとりに向き合っ接することでできる手助け」と、各々名付けるのが妥当と考えられた。このクラスタ分析の

結果からは、福祉の心は、お互いに励まし助け合うこと、困っている人の立場にたって支援を行うこと、尊厳を大切にすること、思いやりの気持ちをもって人と接すること、人の幸せを願うことであると言及することも可能であろう。

また、一番ヶ瀬らは健全な介護関係を築くためには、「利用者にあたたかい思いやりをもちながら、自分がどう思われているかではなく、無私の態度をもって利用者を支えていくこと」が必要であると述べている(一番ヶ瀬ら:2005)。この言葉を受けると、思いやりの心は、相手を思う心を持っていることが基盤となり、さらに専門職として介護をする自分の立場を認識した意見や行動をとるということも、福祉の心に含まれていると言える。

看護学生を対象とした調査(谷川ら2011)では、クラスタ分析の結果、困る人に手を差し伸べること、協力して生きていくこと、一人ひとりが尊重されること、思いやりを身近に感じること、みんなで幸せになること、人間と社会に欠くことのできない支えあう気持ちをもつこと、であった。文章の意味合いを考えると、介護福祉学生の結果と似通った趣であることが示唆されたと言える。

5. 共起ネットワークと福祉の心

共起ネットワークの中心性(固有ベクトル)を見ると、最も共起する語が多い語は「人」であった。「利用者」でも「相手」でも「自分」でもなく、「人」であったことに注目したい。福祉というと、困難を抱えている人がいるからこそあるものだというイメージが強い。もちろん何も困難なことがなければ生まれるものではないと考えるが、対象となるのは困難を抱えている人だけではないのだと、この結果から改めて認識させられる。澤田は「介護福祉士は利用者や家族、地域住民、スタッフらの可能性を信頼し、善さを見だし、自尊感情をもたせてくれる人たちである。個人を尊重し、理解しようと努力し、心のこもった関心を示す人たち、その人なりの努力を正当に評価し、さらに課題を示す人たち、相手の立場でものを考え行動しようとする人たち、このような介護福祉士が、自分の身近にいたら、多くの人は自分らしく生きられる場所を見いだせるであろう。」と述べている(澤田2003:654-655)。利用者を含めた、近くの人のよりよい生活を考え行動できる心こそが、介護福祉士が持つべき福祉の心と言えるかもしれない。

V. 結論

本研究のまとめと今後の課題について言及する。これまでの「福祉の心」の定義をみると、困難を抱える人及びその周囲にいる人を対象にしていることが共通していた。テキストマイニングの結果を見ると、社会全ての人を対象としていることが見られた。介護福祉士には「自他共に人間としての尊厳を守る人権感覚や一人ひとりの生き方に共感できる豊かな感性や、地域と共生していく感性が重要となる。」(栗栖ら 2005)とされていることから、目の前の対象者以外にも目を向けることは重要であり、また、学生もそのことを理解していることがわかる。

さらに、「人間の生きる意味と深いところでつながる価値(観)は、介護や福祉の実践に密接な関係がある。一つの価値に偏ったり、縛られないため、価値について広く深くとらえられることは、福祉実践者、介護者にとって重要である。」(鈴木 2010)と指摘されている。幼少期からの教育や、養成校入学前の経験が福祉の心の養成には大きく影響すると考えられるが、質の高い介護福祉士を育成するためには、養成校でどのような教育を受け、どのような経験を積むかも重要な要因となるだろう。

今回の研究から、性別や「福祉の心」に対する関心の度合いによって、福祉の心の捉え方は差があること、さらに、先行研究との比較を通して考察を進めてゆき、同じ対人援助職であってもそれぞれの領域で異なる点がいくつかみられたことは示唆的である。しかし、福祉の心をあらかず際に「思いやりの心」が欠かすことができないこと、福祉の心とは困難を抱える人とその周囲にいる人、社会全ての人を対象としているというように広い範囲に目を向ける必要があることなど、多くの共通点も認められた。今度より一層サンプル数を増やし、一般化していくことで、福祉の心の尺度を開発することを今後の課題としたい。

付記

本研究を行うにあたり、調査ご協力くださった、介護福祉士養成校の先生方および学生の皆様に心よりお礼申し上げます。

本論文は、2013年3月1日、芦屋大学で開催された日本人間関係学会第37回関西地区研究会での同タイトルの報告に加筆修正を行ったものである。

文献

- 秋山智久 (1988)「社会福祉における専門性と専門職—「自立」との関連において—」『社会福祉学 29 - 1 号』1-25.
- 阿部志郎・長谷川匡俊・濱野一郎 (2009)『福祉の役わり・福祉のこころ 与えあうかわりをめざして』聖学院大学出版会.
- 一番ヶ瀬康子・井上千津子・鎌田ケイ子・日浦 美智江編 (2005)『介護概論』ミネルヴァ書房.
- 吉川政夫 (2008)「第2章1節動機付け」福祉士養成講座編集委員会編『新版社会福祉士養成講座 10 心理学』中央法規出版.
- 阿部志郎 (1993)「福祉の心」京極高宣『現代福祉学レキシコン』雄山閣出版.
- 京極高宣 (2002)『社会福祉学小事典[第2版]』ミネルヴァ書房.
- 栗栖照雄・松本由美子・渡邊一平・塚口伍喜夫 (2005)『介護福祉教育の方法と実践—新しいケアワーカー像を求めて—』角川学芸出版.
- 小塩真司 (2011)『研究事例で学ぶSPSSとAmosによる心理・調査データ解析』東京図書.
- 櫻井茂男 (2009)『自ら学ぶ意欲の心理学-キャリア発達の視点を加えて』有斐閣.
- 澤田信子 (2003)「介護福祉の専門性」吉田宏岳監修『介護福祉学習辞典』医歯薬出版.
- 鈴木真理子 (2010)「第1篇人間の尊厳と自立 第1章人間の自立・自立」橋本正明編『最新介護福祉全書1 人間の理解』メヂカルフレンド社.
- 谷川和昭 (2007)「福祉の心での支援」秋山博介・井上深幸・谷川和昭編『臨床に必要な社会福祉援助技術演習』弘文堂, 185-188.
- 谷川和昭・趙敏廷 (2011)「看護学生アンケートによる福祉の心の素描」『関西福祉大学社会福祉学部研究紀要』15(1), 49-58.
- 趙 敏廷・谷口敏代・原野かおり・松田実樹・谷川和昭 (2013)「『介護福祉学』誌にみる介護福祉学の研究傾向」『介護福祉学』20(2), 152-158.
- 成清美治 (2009)『ケアワーク入門』学文社.
- 新野三四子 (2007)『福祉マインド教育実践論』ナカニシヤ出版
- 平塚良子「人間福祉の教育」秋山智久・平塚良子・横山穰 (2004)『人間福祉の哲学』ミネルヴァ書房, 181.
- 樋口耕一 (2012)「KH Coder Index Page」(<http://khc.sourceforge.net/index.html>, 2012.12.8)
- 細井亮佑・寺田充伸・小林祐司・佐藤誠治 (2011)「テキストマイニングを用いたアンケート自由記述欄の分析による生活環境評価」『日本建築学会九州支部報告』50, 505-508.
- 村上山三郎・山口信治・硯川真旬編 (1992)『社会福祉』川島書店.
- 三宅美智子 (2010)「介護福祉専門職におけるソーシャルワーク・マインドの重要性—虐待防止に対する学生の意識を手がかりに—」『介護福祉研究』18(1), 68-72.
- 山室軍平 (1925)『社会事業家の要性』中央事業協会地方改善部, 12.